

「生成の世界を思考すること、
その思考自体についての表現が、
この時代のアーティストの仕事だと思っています」

Photography by Eiji Ina



NI people

取材・文＝桜井裕子

「思考」と「知覚」の あいだを表現

流れるように弧を描く細い線、砂が零れ落ちるようにさらさらと広がっていく粒子……。木本圭子さんの作品は、何を使って描かれたものなのか一目見ただけではよくわからない。実はこれは、コンピュータによって描かれている。とはいっても、イラストレーターのような既存の画像ソフトを用いているのではない。木本さん自らがプログラムをしてモニタ上にあるダイナミズムを生み出し、その動きの瞬間瞬間をシャッターを押すようにして何枚も切り取り、そこから「この一枚」を選出したものだ。

木本さんがコンピュータを使い始めたのは、今から二〇年近く前、一部の専門家以外はその存在自体をまだ知らないような時代だ。「美大を出て二、三年目の頃ですね。おもしろそうな機械が出たということ、何も知らないまま買ってしまった」

当時のマシンの容量は、わずか128K。できることは限られていたが、「プログラムの文字や数字がモニタ上でビジュアライズされる、そのことにびびくりしたんです。手で描く以外にもできることがあると直

感しました」

手探りでマシンをいじり始め、一行一行プログラムを書いていくうちに、木本さんはあることに気づいたという。それは、一般に美術は空間重視で視覚から出発するが、このようにしておこなう制作は視覚から入るのではない、ということだった。

「最初にあるのは、メカニズムを思考することであり、『見えるもの』ではなく、『動いていること』でした。プログラムを書くことによって、初めて、自分はどうなことを考えていたのかが見えてくる。つまりこれは、考えてから知覚で認識するに至るまでの、途中段階の表現なのだと思います」

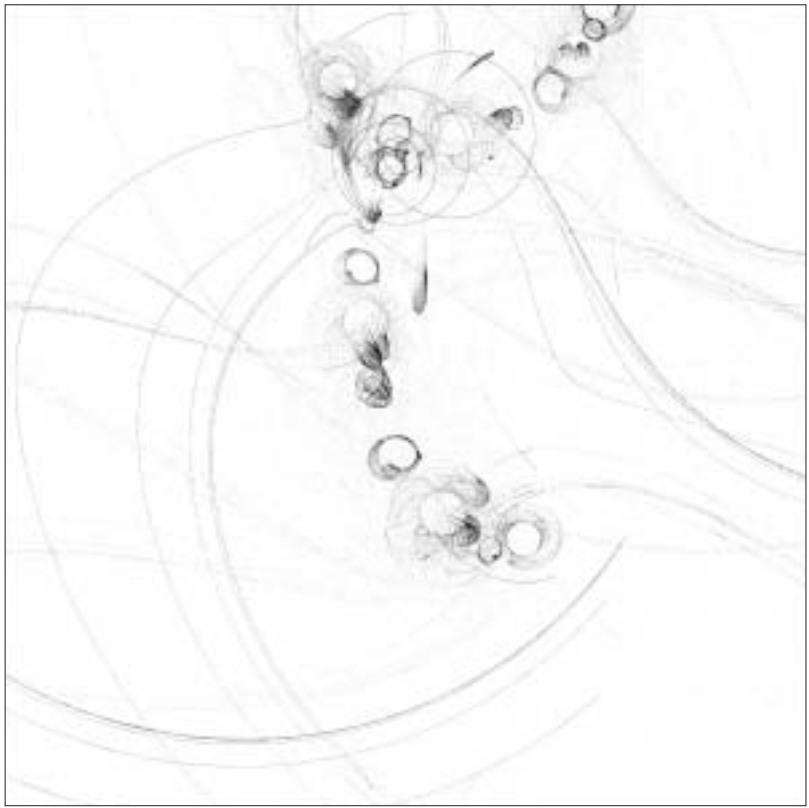
見ることから離れて

動き、すなわちダイナミズムの表現は、視覚重視の静止画に時間性を加えれば成り立つというものではない。必要なのは、従来の美術の「制度」とはまったく異なる組み立て方だ。しかし、制度を揺さぶる仕事というのは理解されにくいもので、木本さんも、「美術分野の人よりも、理数系の研究者や詩人など他分野の方が反応してくださる」と笑う。

なかでも、複雑系コンピューティ

きもと・けいこ

多摩美術大学テキスタイルデザイン科卒業。グラフィックデザイナーとして活動を始めた1988年頃からコンピュータを使った数理的な手法による造形を始める。97年頃から、さらに一歩進んで、動的表現を探索制作、研究を開始。現在はJST ERATO合原複雑数理モデルプロジェクトに所属し、数理系の研究者と共同研究をおこなっている。



「Imaginary・Numbers」 Tokyo Art Project, Inc

ングの第一人者・合原一幸氏との出会いは大きかった。数年前に木本さんの作品を見た合原氏は、複雑数理モデルの研究プロジェクトへの参加を提案。それを受けた木本さんは、現在、数理系の研究者たちと刺激を与え合いながら作品をつくっているが、研究を間近で見えていて、「これまで人間が“わかっている”と認

識していたこととは、まったく内容の違う“わかる”を扱おうとしている。これまで扱えなかった領域を扱う新しい思考方法を生み出している”と感ずるという。

「今までの構造とは違うダイナミズムという点に、私の仕事と共通するビジョンを感じます。今、さまざまな分野で、共通した新しい世界観が出てきている。時代が動くときというのは、きつとそういうものなんでしょうね」

未来へ開かれた可能性を担う

かつては、コンピュータを使っているというだけで注目されることもあったという。しかし木本さんは、あくまでもやりたいことを実現するために、画家が絵具や筆を使うのと同じようにコンピュータを使ってきた。コンピュータが特別なものではなくなった現在、ようやく木本さんの仕事が真に理解されていく段階に入ったといえるだろう。

「128Kマシンとの出会い以来、コンピュータの進歩にずっと付き合ってきました。もちろん、テクノロジはこれから進むでしょう。で

も私は、テクノロジーに誘導されるのではなく、表現の一環として普通に使っていきたい。そしてこれからは、科学や技術との接点で、それらや時代を意識しながら制作を続けていくと思います」

ノイズやエラーがあつて成り立っている生成の世界、それを思考すること自体についての表現、それがこの時代のアーティストがなすべきことだ——というのが木本さんの信念だ。そして、これは“私の表現”ではなく、“この時代には誰かがする表現”だと言う。「自分一人で完成させるものとは違う、という意識があります。私ができなかったことは、次の世代のアーティストが引き継いでやってくればいいんです」

多くのアーティストが“私の仕事”だけに関心を向けるのに対して、木本さんは、何か大きな可能性の一部を担っているという、開かれた感覚をもっている。どこかやはり科学者や技術者と共通する資質があるのかもしれない。木本さんのような人が、少し先の未来のための貴重な道標だといえるのではないだろうか。